



”予感”後編

Aパート



yasuhiro

私の選択

うん。あれは夢の中での出来事だから、心配することないよね。と自分に言い聞かせて顔を上げると、彼がこちらを心配そうに見ていた。

「顔色悪いけど、大丈夫か？」

私の体調を気にして、声をかけてくれたみたいだ。

それに、私は彼を心配させないように

「全然、大丈夫だよ。ちょっと、考え事してただけ。」

笑顔で気分がいいように話した。

「そうか。ならいいんだが。」

彼は少し安心したような顔で話す。

いつもの電車の踏み切りが見えてきた。

これだけは言うておこうと思い、電車の踏み切りを見ながら、

「また、明日会おうね。」

と一言だけ伝え、彼の方を見る。

驚いたような顔をしていたが、一瞬で笑顔になる

「ああ。そうだな。」

と彼は応える。

帰り道、夢のことが頭の中をよぎったが、気にしないようにした。

(今日は帰ったら、なにしよっかな)

別のこと考えながら帰った。

再び、太陽は昇り、次の日

いつものように、布団から起きて、洗面所で顔を洗い、制服に着替え、キッチンに向かった。そこで、オーブントースターに食パンを入れ、時間をセットし、スタートボタンを押す。そして、なんとなくテレビの電源を入れる。

ブンとなった後、画面が徐々に明るくなり、音楽が流れ始める。その音楽を聴いていて、(どっかの国家の歌か！なにを放送しているの?) と思い、画面を凝視する。

画面に映し出されたのは、生き生きした若い男性が足踏みしながら、われらの母国を守ろうと大きな声で訴えかけていた姿だった。

(あ〜。あれか。)

最近、海外で紛争や暴動が増えてきて、社会問題になっているから、各国が外国と協力して、紛争や暴動を鎮圧しようとの活動らしい。

(それで、どうなんだろうな。)

と思ったとき、チンと聞こえたので、我に返る。

(パン焼いてたの忘れてた。)

パンを焼いていたことを思い出し、急いでパンを食べ、家を出た。

いつものように教室に入り、おはようと挨拶して自分の席に座る。

周りを見渡す。石島君はまだ来ていないようだ。

(ん？ 前もどこかで。)

チャイムが鳴り、先生が教室に入ってきた。

なにか引っかかるものがあったような気がするが気にしないことにした。

「ホームルームを始めるぞ。」

結局その日、石島君が学校に来ることはなかった。

沈みそうな太陽が照らした、いつもの帰り道を私は歩いていた。

(石島くん、こなかったな～。)

他の生徒からも先生に質問がいくつかあったが、先生も知らないようだ。

(どうしたのかな～。明日は何もなかったような顔で来るかもしれないし、あまり気にしすぎないようにしよう。)

自分に言いかけせながら、帰った。

信じる？

次の日、学校に行き、教室に入ると、5,6人がなにやら話しているのが視界に入った。なにを話しているのが気になったかので、話しかけてみた。

「なにかあったの？」

話していた人たちがこちらを向き、

「石島くんの親が搜索願いを出したみたい。」

「搜索願い？」

「2日前学校に行ったきり帰って来ていないみたい。」

(私と別れたあと、家に帰っていないということ？ 事件に巻き込まれたのかな、事故に巻き込まれたのかな、あまりこうゆうことを考えたくないけど、あの石島君が家出というのも考えられないし。)

というところで、

「大丈夫？ 顔色悪いけど。」

その言葉で我に返って、

「うん。大丈夫だよ。話してくれて、ありがとね。」

話してくれた人は、「うん」と言って、話に戻ったようだ。

押しおせる不安に耐えながら、席に戻った。

今日は体調不良を理由に部活をやらないで、帰ってきた。

いつもより早い帰りに、母が驚いたような様子で出迎えてくれた。

「どうしたの？今日は早いのね。」

「うん。ちよとね。」

と素っ気無い態度を取って、自分の部屋に入った。

ベッドの上で丸くなって、頭の中でいろいろ考えみたが、答えは出てこなかった。

こんこんとドアをノックした音が耳に入った。

「夜ご飯できたわよ。」

一言だけ言って、足音が遠ざかっていった。

リビングに戻ったようだ。

(とりあはずは、夜ご飯を食べてから考えよう。)

自分に言い聞かせ、リビングに足を運んだ。

リビングに入ると、キッチンに母が立っていて、まだ、何かの準備をしているようだ。

「先に食べて」

テーブルまで向かい、椅子に座り、お言葉に甘えて「いただきます」と手を合わせて食べ始めた。

半分ぐらいご飯を食べた時、母が向かいの席に座った。

「今日はどうしたの？ 早く帰ってきて。」

この質問は2回目だ。

「う～ん。」

曖昧な態度。

私は迷っていた。あのことを相談するべきかどうか。

(う～ん。決めた。)

下を向いていた顔を正面に向け、視線が母を捉える。

母はにこやかにこちらを見つめていた。

私は再び視点を下に移動させて、祈るように左手の指と指の間に右手の指を入れ、手の平を近づける。

ゆっくり語り始める。

「実は今日、学校で… 石島君が行方不明ていうことを聞いたの。」

「うん。」

母は相槌を打ってくれる。

「事故や事件に巻き込まれたんじやって、心配になっちゃって。そのことで頭がいっぱいで部活に行く意欲がなくなっちゃって、今日は早く帰ってきたの。」

早く帰ってきた理由を話し終えて、ふうと一瞬不安が和らいだが、母がどんな反応をするのか、怒られるのではないかと違う不安が私を支配する。

「信じてみれば。」

一瞬、私は耳を疑う。

(信じてみれば?)

聞いた言葉が合っているのか、不安に思いながら、確認のために、母が言った言葉を繰り返す。

「信じてみれば?」

母が当然のように

「そう。」

「事件や事故の可能性もあるし、自分の意思で何処かに言ったのかもしれない。でも、それを心配していても何も変わらない。いつものように学校に行き、学んで、部活をやって、帰ってきて、寝る。当たり前のことをしていればいいじゃない。今、あなたがすべきことはいつものように生活して、信じることだけ。」

ちょっとした反抗心は働いたけど、母が言う通りだと思った。

その後

それからの私は石島君がいた頃のように学生生活に力を注いだ。前までは受験なんて考えたことがなかったけど、3年になった時、自分が望んだ学校に通えるように今から勉強に打ち込んだ。部活にも、あとで後悔しないように努力した。でも、そうした一番の理由は行方不明の石島君のことをあまり考えないようにするためだと思う。

石島君が行方不明になってから3ヶ月が経過した。

最近、石島君の噂をする人もいなくなった。

夕暮れの帰り道を歩きながら、石島君のことを考えていた。考えないようにしようと努力はしているが、なぜだか、この帰り道で石島君のことを思い出してしまう。

足音が耳に入ってくる。

別に足音が聞こえてくるのは珍しいことではない。確かにこの道は滅多に人とすれ違うことはない。けど、絶対になんかということではない。

足音が止む。

目の前に人の気配がする。

恐る恐る顔を上げる。

まず、洋服の色が目に入った。濃い緑色だった。

次に、胸のところあたりにバッチが目に入り、

(軍服?)

と思いながら、さらに顔を上げる。

私の前に立ち止まった人の顔を見た瞬間、思考が停止した。

(え?)

立ち止まった人は何かを達成したような、やわらかな笑顔で見つめていた。

「ただいま。」

彼は一言だけ言った。

その言葉で私は我に返った。

「おかえり。」

と私は返した。